

Ásatru(アウサトゥルー)とHávamál(ハウヴァマウル)から辿る ヴィーキングの社会心理 (通俗道徳)

石 渡 利 康

Toshiyasu ISHIWATARI. The Vikings spiritual law induced from Hávamál and Ásatru. *Studies in International Relations* Vol.37, No.1. October 2016. pp.45 – 51.

The Vikings as a rule have been characterized as sea barbarians. But in reality they had an advanced civilization. This short paper aims at informing readers vikings spiritual law or moral code of conduct by the inductive reasoning, taking examples from Hávamál and Ásatru. Hávamál is Sayings of the High One(Odin) in the Codex Regis of the 13th century. Ásatru is the modern rebirth of the old indigenous faith of the Norse peoples. Hávamál's original text is written in Old Norse. The translation is mine.

1. はじめに

本研究は、世界史の中に「遠征」という一時代を画したヴィーキング社会の社会心理の一端を探ってみようとするものである。関心の切っ掛けは、現在私が執筆中である『北欧法の発展と理念』の内容と関係する。

今までに書いた99冊の著書の中に、14冊からなる北欧法双書がある。その中の一冊が『アイスランド法の発展と理念』である。『北欧法の発展と理念』という書名は、これをもじったものである。その理由は、次のようである。

実は、『アイスランド法の発展と理念』については、忘れがたい思い出がある。1987年アイスランドを訪れた際、女性で初めてのヴィグディス・フィンボーガドゥッティル (Vigdís Finnbogadóttir) 大統領に官邸に招かれ、同書を謹呈した。大変喜んで下さり、敬称なしの *tu toyer* で長時間話し込んだ。

そして、夜は晩餐会に招かれた。それも、二人きりの晩餐会である。会話は弾み、夜遅く官邸を辞する時、秘書官が「今まで大統領が二人だけの晩餐会を催されたことはありませんでした」といった。『アイスランド法の発展と理念』を余程気に入って下さったに違いない。私にとっては、南アフリカ共和国のネルソン・マンデラとデ・クラ-

ク両氏のノーベル平和賞受賞式典とその後少人数での晩餐会に招かれたのと合わせて深い思い出となって残っている。

さて、『北欧法の発展と理念』の記述には、当然のことながらヴィーキング時代の法とそれが *dena lagu*, すなわちデーン・ロー (Dane law) として、英国を初めとして北大西洋諸島地域に及ぼした影響の内容が含まれる。言うまでもなく、法は人間の精神的所産であり、社会文化である。では、その法を創造した人々はどのような社会心理をもっていたのか、という当然の疑問が生じる。

ヴィーキングは、どのような社会心理をもって行動していたのか。これが、本論の最大の関心事である。といっても、ヴィーキングが生きた時代は約1000年も前なので、それを探るのは大変である。当時の法的社会については北欧を中心に研究がなされている。また、私も数々の著書や論文を出している。しかし、法律分野の文献では、ヴィーキングの社会心理について直接的に書かれたものは殆どないのである。

そこで、私は、主として2つの資料に頼り目的を達することにした。1つは、古代北欧歌謡集エッダ (Edda) の中のオーディンの智恵ハウヴァマウル (Hávamál) であり、もう1つは、前世紀の中頃に北欧で復活し法的合法性をもつ北欧古代宗教であるアウサトゥルー (Ásatru) の中に見られる

真髓である。この2つから論理的推論を用いて、古代・中世のヴィーキングのlex insitaを含めた社会心理、すなわち「通俗道徳」を求めようという訳である。これらに加えて、信頼性のあると思われる一般的な記述をも参考とした。社会科学の分野においては、純学理的なものとうそでないものとの資料信頼度の厳密な線引には難しい場合もあるから、一般的記述物も利用可能な場合がある。

社会心理自体に入る前に、ヴィーキングと彼らが生きた社会の法について前提的に触れておくこととしよう。

2. 3方向へのヴィーキング遠征

現代北欧語のvikingは、古代北欧語のVikingrに由来する。Vikingrという明辞は、vik(入江)にingrを付けて入江に住む人だという説と往っては戻ってくるという意味の動詞vikaに由来するという2つの説がある。何れにしてもヴィーキング＝海賊というのは、間違った理解である。ましてや、バイキング料理とは全く関係がない。

ヴィーキングは、元来は、デンマークやノルウェー、スウェーデンの地に住む農民であった。しかし、彼らは造船技術に長けていて、大洋に乗り出す船を造る事ができた。先端に竜頭の付いた、竜骨によって強度をもった大型のヴィーキング船と俊敏な小型の攻撃専用のヴィーキング船をもって、攻撃もしたが交易活動も行ったのである。さらには、植民や大陸発見などの行動も達成した。彼らの活動は、海賊という1語で示すことは不可能だし適切ではない。

一般的に、ヴィーキング時代といわれているのは、8世紀の末から11世紀の初めまでの期間である。それ以前から船団を組んでバルト海から大西洋へと乗り出していた北欧の人々がヴィーキングとして恐れられるようになったのは、793年の英国のリンディスファーン(Lindisfarne)島を襲ってからである。通常、これがヴィーキング時代の始まりであるとされている。

ヴィーキングの遠征方面は、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンといった出身地によって違っている。大雑把に言って、デンマークのヴィーキ

ングは英国とその周辺諸島、大西洋を下って地中海にまで達している。南下遠征である。スウェーデンのヴィーキングは、バルト海を通り南東に向かい、ロシアの地で集落を建設し黒海に到った。ノルウェーのヴィーキングは、西方に進路をとった。アイスランド、グリーンランドを発見し、アイスランドでは植民を行った。アメリカ大陸を最初に見出し、それをヴィーンランド(Vinland)と名付けたのも彼らであった。

これらは、あくまで概要である。大体、ヴィーキング時代には、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンといっても、現在のような完全な統一国家が形成されていたわけではない。これらの土地には幾つかの小王国と地方法が存在していたのである。幾つかの小王国をまとめていた国王は存在した。といっても、現在でいう国王ではなく、国王の最大の役割は戦闘において指揮を執る権限をもつくらいであった。初期のヴィーキング遠征は、地方的に組織された遠征だったのである。

3. ヴィーキング社会の法構造

ヴィーキングの生きた社会は、原始国民統治社会として位置付けることができる。というのも、彼らは、基本的に平等観をもっていたからである。

未だ統一的王国が完全に形成されていなかった当時の社会は、法的に見ると「地方法」(landskabslov)が適用された幾つかの地方から成り立っていた。デンマークを例にとると、3つの地方(land, ラン)があった。ユーラン(Jylland), シェラン(Sjælland), スコーネ(Skåne)がそれらである。Landの中には、ヘレズ(herred)と呼ばれる「小地方」があった。スウェーデンには西ヨータランド(Västgötaland)を初めとして5つの地方(land, ランド)があった。

ノルウェーにおいては、デンマークやスウェーデンのlandに相当するのは、フェルキ(fylki)であった。フェルキは、いくつか集まってラグドゥメ(lagdome)とよばれる法地域を構成していた。

地方法が行われていた当時の社会では、多くの事項はティング(ting)と呼ばれる全民集会において、住民によって直接的に決定された。ティン

グは、各々のランに1つずつあった。デンマークの例では、ユーラン地方ではヴィーボー (Viborg) に、シェラン地方ではリングステツズ (Ringsted) に、また、スコーネ地方ではロン (Lund) にランのティング、すなわちランスティング (landsting) が置かれていた。ランの中のヘレズもティングをもっていた。これは、ヘレズスティング (herredsting) と呼ばれた。

ティングは、公開の意味をもたすために野外で開催された。ティングの所在地には、石の上に4本の棒 (fire stokke) が置かれ、初期には議事手続きを司る者が座っていたが、後には裁判官、書記、ティング指揮者が席を占めるようになった。ティング開催日も決まっていた。ユーラン法には、half maneth ting とある。これは、1ヵ月に2回開かれるという意味である。ティングで指揮を執るのは長老アルディング (aldingae) であった。というのも、北欧では年長者に特別の敬意が払われていたからである。

ティングに衆参するのは、武器をとりうる自由人の男たちであった。ティングにおいては、特別に平和が要求され、殺人を犯したりする者はアウトロー (fredløs) の刑に処せられた。

デンマークのティングは裁判所としての機能と共に、王の選出、開戦や講和の決定、共通利害関係に関する決定等の行政的機能をもっていたが、立法機能については大きな役割を果たさなかった。というのも、慣習法が重要な機能をもっていたからである。

デンマークのランスティングと異なって、スウェーデンのそれはかなりの立法機能をもっていたようである。ノルウェーではフェルキが集合してラーグティング (lagting) を構成した。ラーグティングは、立法機能と司法機能を行使した。

874年にノルウェーのヴィーキングによって植民され、930年に全島議会アルシンギ (Alþingi) を創設したアイスランドは、1262年の古き協定ガムリ・サットマウリ (Gamli Sáttlali) によってノルウェーの納税国となったが、それまでの間は、自由国シオウズヴェルディ (Þjóðveldi) を構成していた。アルシンギは、立法権と司法権とをもっていた。

北欧のヴィーキングは、こうした法社会の中に生きていたのであり、「国は法によって打ち建てられなければならない」(Meth logh skal land bygiaes) という法諺が妥当性をもっていたのである。この法諺の中には、法治主義と法の支配の原則が内包されていると考えられる。

余談だが、英国の約3分の1を占領してデー・ロー (dena lagu) を施行したヴィーキングの法の支配の理念が Magna Carta に移入され、法の支配の原則が出来たというのが、私の幻想的仮説である。これに関しては、現在実証中である。

4. Ásatru 復活と教義内容

これより直路、本論の課題に入ろう。20世紀の後半、アイスランドでアッサトゥルー (Ásatru) と呼ばれる宗教活動が発生した。アッサトゥルーとは、神々を意味するアッサ (ása) に信奉ないしは信仰を意味するトゥルー (tru) を加えた言葉で、具体的には「ヴィーキング時代の古代神崇拜」のことである。この宗教活動は、他の北欧諸国にも広がっている。ヴィーキング時代の古代の神とは、オーズィン (Oðinn) を主神とする北欧神話として私達が知っている神話の神々のことである。

アッサトゥルーという言葉は、実は19世紀半ば頃からナショナリズムと関連して使われている。ノルウェーの作曲家エドヴァール・グリーグ (Edvard Grieg) が1870年作のオペラ『オーラヴ・トゥリュグヴァソン』(Olav Trygvason) の中で使ったのは有名である。

なぜ20世紀になってアッサトゥルーが復活したかについて、「アイスランド倫理人道協会シーズメント」(Siðmennt. Felag si raenna humanista à Islandi) が2005年に出した情報誌によれば、アイスランド人はキリスト教から見て基本的に「異教的心情」をもっているという。アイスランド人は神を信じているが、その神は「母なる自然を」を排除するものではない。

北欧諸国は1000年頃から1100年頃にかけてキリスト教化されていくが、宗教に対する lackadical (曖昧な) 心情は、おそらくその起源をキリスト教への改宗の際の心理状況に求めることができる。

通常、改宗とは間違っただけの宗教を捨てて真であると理解される信仰に至ることである。しかし、当時の北欧人は、昔から信仰していた神々が本当は存在していなかったと突然悟ったわけではない。

デンマークの著名な精神分析学者のトーキル・ヴァンゴーアは、この間の事情に関して書いている。北欧古来の神々は、全能ではなく、また絶対的服従を強いることもしない身近な存在であった。彼らが信仰を移し代えたキリスト教の神は、オーズインヤソウル (Pór) のようなものだったが、これらの神々よりも強力だと思われたのである。キリスト教への改宗時において、秘密裏であるならば古代の神々を信仰してもよい、との決定がアイスランドの全島集会であるアルシンギでなされた事実の背景には、改宗に関するこうした概念が横たわっていたのである。

アイスランドのアッサトルーについて、シーズメント創始者の1人であるクヌートソン (knutson, Hope) は、こうしたlackadisticalな現象を「アイスランド・パラドックス」と呼んでいるが、この現象は他の北欧諸国においても程度の差こそあれ認められるのである。敢えて云えば、「北欧パラドックス」が存在するのである。

アッサトルーの教義は、単に宗教的なものではなく、人生に必要な崇高な価値を求めようとするものである。人がもつべき崇高な価値 (verð) として、アッサトルーは、次の9つを定めている。それらは、「勇気」(hugrekki)、「真実」(sannleikur)、「名誉」(heiður)、「忠実」(trúmennska)、「抑制」(agi)、「親切」(gestrisni)、「勤勉」(starfsáfuqi)、「独立」(sjálfstraust)、「忍耐」(þol) である。

これらの価値を1人で体現するのは、困難である。そこで、集団を構成して努力を重ねていこう、というのがアッサトルーの行動主張である。

5. Hávamálの概要

アッサトルーの求める崇高な価値が、ハウヴァマウルに基礎を置いていることは明らかである。ハウヴァマウルは、アイスランドの韻文による古エッダ中の歌謡箴言詩である。作られたのは8世紀から11世紀の間、すなわちヴィーキング活動が

最も盛んで精神的にも高揚していた時代である。言い換えれば、ヴィーキング世界の精神的所産である。

Hávamálの直接的意味は、「徳高き者の言」である。フランス語ではLes dits du Tres Haut, 英語ではSaying of the High One, イタリア語ではLa voce di Odinoと訳されている。徳高き者とは主神オーディンのことであるから、日本では「オーディンの箴言」とされている。「ヴィーキングの知恵」と呼ばれることもある。「古代北欧の叢書」といっても、間違いではない。

ハウヴァマウルはリョウザハウットウル (ljózaháttur), すなわち詩的韻律をもって書かれている。詩的韻律とは、強調されたシラブルの母音あるいは子音が同じ母音あるいは子音の反復によって反響するというものである。すなわち、1つのスタンザ (詩節) は3詩行から構成される2単位から成立し、それぞれの単位の始まりの2行は相互に韻律で結合されており、3行目はその行の中で韻律によって結合されているのである。

ハウヴァマウルは164のスタンザから成り立っており、各スタンザはそれぞれの叢書事項を謡っている。

6. ヴィーキング9つの精神的道徳

ヴィーキングたちは、社会の基礎に根付いているレックス・インシタ (lex insita) と深く結びついていた精神的道徳をもって生きていた。精神的道徳は、崇高な価値を形成するものであると理解された。それらの道徳は、9つである。それらを164のスタンザの中から見出だしてみることにする。原語の古ノルド語からの拙訳は詩的韻律を無視し、意味の理解に利するようにした。詩的韻律を無視した理由は、韻律を踏む操作が私の筆力を越えているからである。カッコ内の数字はスタンザの番号を示している。拙訳の後の〈〉中は、私のショート・コメントである。

1 勇気 (hugrekki 15)

Pagalt ok hugalt
skyli þjóðans barn
ok vígdjarft vera
glaðr ok refr
skyli gumma hverr
unz sinn bíðr bana

人を治める者の息子は
闘いにおいて勇気をもたなければならない
そうすれば死ぬまで幸せで快活でいられる

〈ヴィーキング時代においては、闘いは男の価値を示す場でもあった。幸せは自らの勇気で獲得するものであった〉

2 真実 (Sannleikur 28)

Fróðu þykkísk
er fregna kann
ok segja hit sama
eyvirtu leyna
megu ýta synir
þvi er gengr of guma

いかに質し話すかを知る者は賢明である
何事も隠さず、真実を求める者の名声は高まる

〈勇気は真実を表象し、真実はさらに勇気を倍増する〉

3 名誉 (heiður 16)

Deyr fé
dejja fraendur
deyr sjálfur it sama
en orðstirr
deyr aldregi
hvem er sér goðan getur

家畜は死に、縁者も死に絶える
人は死すべき存在である
称賛の言葉は決して滅びず
高潔な名もまた生き続ける

〈ヴィーキングにとって、名誉は死後も続くものである。名誉ある者のみが天上界のヴァルハッドゥルに住むことが許されるのであった〉

4 忠実 (trúmennska 43)

Vin sínum
skal maðr vinur vera
þeim ok þess vinr
en óvinar sins
skyli engi maðr
vinar vinr vera

友とは一生忠実であれ
友の友とも忠実であれ
しかし、友の敵とは友となっではいけない

〈忠実な心は、様々なレベルで求められるが、人間関係の中では、八方美人は誉められたことではないのである〉

5 抑制 (agi 54)

Meðalsnotr
skyli manna hverr
aeva til snotr sé
þeim er fyrða
fegrst at lifa
er vel mart vitut

賢くなければいけないが
賢すぎてはいけない
あまり物を知らない人にとっては
賢すぎる人と付き合うのは気楽でないから

〈人間、何事も中庸が肝要である〉

6 親切 (gestrisni 2)

Gefendr heilir
gestr er inn komminn
hvar skal sitja sjá?
Mjök er bráðr
sá er bröndum skal
síns um freista frama

心ある主人よ
来客にどこに座ってもらったらいいか
出入口近くだと客は居心地が悪い

〈もてなしは、常に相手の気持ちになって事を行い、初めて真のもてなしとなる〉

7 勤勉 (starfsafugi 59)

Ár skal lisa
sá er á yvkenndrfá
ok ganga síns verka á vit
mart um dveir
þann er um morgin sefr
hálfir er auðr und kvötum

人手がなければ
早く起きて仕事をすればいい
いつまでも寝ている者は手抜きをし
速く仕事をこなす者は豊かになる

〈怠惰は悪で、富をもたらさない〉

8 独立 (sjálfstraust 8)

Hinn er saell
er sér of getr
lok ok liknstafi
ódaella er við þat
er maðr eiga skal annars brjóstum i

称賛と尊敬を内に秘める者は幸せである
他人の心を気にしなければならぬのは

大変なことである

〈人にどう思われるかばかり考えて行動する者は、尊敬を得ることができない〉

9 忍耐 (ðol 65)

Orða þeira
erðmar öðrum degir
opt hann gjöld um getr

他人に投げつけた言葉によって
人は2倍仕返しを受ける

〈忍耐は、常に善である〉

7. おわりに - 「懐古=進歩」 -

ハヴヴァマウルの9つの徳目は、800年から1200年頃まで北欧土着の多神教の世界に生きたヴィーキングたちの志向したものであった。これら徳目の復活した社会を夢見るアウサトゥルーは、一見懐古的色彩を持っているように見えるが、実際は違っている。いつの時代にも、個人が守るべき価値の遵守という社会的規範が存在している。現代社会においては、規範のもつ価値性は疎んじられがちである。現代は、特に「名誉」をはじめとする普遍的価値の喪失の時代であるといっても過言ではない。9つの徳目を重視することは、単に懐古ではない。この場合、懐古は同時に進歩である。何故ならば、普遍性をもつ9つの徳目を実現しようとする努力は、個人の自発的内的進化を促すからである。

参考文献・資料

【邦文文献】:

- 石渡利康:「アイスランドにおける改宗と社会構造の変化」, 国際関係学部研究年報9集, 1988年。
- 石渡利康:『アイスランド法の発展と理念』, 高文堂出版社, 昭和63年。

- 石渡利康: 『スカンジナビア法史論』, 八千代出版, 昭和58年。
- 石渡利康: 「古代北欧の箴言」, 『国際関係研究』第15巻1号, 平成6年。
- 石渡利康: 「北欧古代の神々の夜明けーアイスランドのアッサトゥルー (Ásatru) ー」『国際関係研究』第28巻3号, 平成19年。
- 石渡利康: 『北欧共同体の研究』, 高文堂出版社, 昭和61年。
- Neckel, V. G. & Kuhn, H. (Ed.): 『エッダー古代北欧歌謡集』(谷口幸男訳), 新潮社, 昭和48年。
- Guðrun Publishing: 『Hávamál ヴァイキングの知恵』(谷口幸男訳), 1995。
- Vangaard, Torkil: 『ファロス シンボルの世界史』(石渡利康訳), 講談社, 1974年。
- 安丸良夫: 『方法としての思想史』, 校倉書房, 1996年。

【北欧諸語文献】

- Agustsson, Simon Joh.: “Huglei ingar um Hávamál.” Lesbok morgonbladsins. Sunndagar 8, mai 1955.
- Anglo-saxon. net: Hávamál (www.anglo-saxon.net/on/Havamal.html 最終確認 2016/03/25)
- Ásatru (paper). Reykjavik. 2007.
- Brate, Erik: Havamal, den höges sång (paper). n. d.
- Hávamál (www.volspa.org/havamal.html 最終確認 2016/04/03)
- Hedeager, Lotte: Skuggor ur en annan verklighet. Wahlstrom & Widstrand, 1998.
- Lassen, Annette: Odin på kristent pergament. En texthistorisk studie. Museum Tusulanums Forlag. 2011.
- Siðmennt, Felag si raenna humanista à Islandi (<http://www.sidmennt.is/>, 最終確認 2007/09/17)
- Zeeberg, Peter: Saxos Danmarkshistorie. 2000.

【フランス語文献】

- Boyer, Regis: L'Edda poetique. Fayard, 1992.
- Ragnarok. fr: Le havamal (“Dits du Tres-Haut”) (Ragnarok.fr/pagesperso-orange.fr/Pages/sectionmediateque 最終確認 2016/04/10)

【イタリア語文献】

- Costanzo, Antonio: Havamal. La voce di Odino. Diana Edizioni. 2010.
- Valentino, Luca: “Havamal: la voce di Odino”. Centro Studi la Runa. 27 Gen 2012.

【英語文献】

- Davidson, Hilda Ellis: The Lost Beliefs of Northern Europe, Routledge, 1993.
- Jonasson, Bjorn: Sayings of the Vikings (Hávamál). Guðrun. 2001.
- Nine noble virtues of Ásatru (<http://www.odinsfolk.ca/O.V.A.%20-%20NNV.htm>. 最終確認 2015/04/26)
- Norden, Ingeborg S.: Ingeborgs Unofficial Ásatru (Paper). 1996.
- Shettler, Gray: Living Asatru. booksurge pulisher. 2003.
- Strom, Folke: Nid ergi and old Norse moral attitudes. The Dorothea Coke memorial Lecture in Northern studies delivered at University College London 10 May 1973.
- “The impliments of knowledge of aquisition in Hávamál and Sigdrifumál. A multidisciplinary approach to Eddic Wisdom Poetry.” Háskoli Íslands Hugvisin-dasvi. 2012.
- Poetic Edda (tr. by Carolyne Larrington). Oxford University Press. 1996.
- The Viking moral code. (<http://asp52.hubpages.com/hub/The-Norse-warrior-code>- 最終確認 2016/04/04)

(本稿は、2016年5月7日に開催された、国際文化表現学会第12回全国大会で発表した研究内容の予稿に加筆、修正を行ったものである。)